

# 教育研究創発国際研修における学術活動報告書

令和 6 年 8 月 30 日

氏名 山口 ゆり乃

所属 比較教育社会学 コース

指導教員名 三輪 哲

1. 研究課題 新卒者の在学中の活動・就活でのエピソード選択と初職との関係
2. 報告する学術活動の実施期間 令和 6 年 7 月 28 日 ~ 令和 6 年 8 月 1 日
3. 日本学術振興会特別研究員 (DC) の現在の採用状況 DC1 DC2 採用無し
4. 学術活動
  - 国外 国内
  - ①英語論文公表
  - ②研究科教員の研究プロジェクト参加
  - ③フィールドワーク
  - ④国際会議 (研究発表 運営補助 出席のみ)
  - ⑤研究会 (研究発表 運営補助 出席のみ)
  - ⑥研究指導委託
  - ⑦留学
  - ⑧国際研修
  - ⑨国際インターンシップ
  - ⑩その他 (具体的に: )

## 5. 学術活動実施の概要

※上記4で選択した学術活動について具体的に記載してください。括弧内の概要を必ず記載してください。

- ① 英語論文公表  
(著者、発表論文名、掲載誌名等、発表年月巻号、発表年月日等、論文内容の概要)
- ② 研究科教員の研究プロジェクト参加  
(プロジェクト名、代表研究者名、自身の具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、プロジェクトの概要)
- ③ フィールドワーク  
(調査先機関等、国名・都市名、具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、調査先の概要)
- ④ 国際会議  
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、学会・会議名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑤ 研究会  
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、研究会名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑥ 研究指導委託  
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究、研究テーマと受入教員、受入期間(年月日)、具体的な研究活動、研究発表内容等の概要)
- ⑦ 留学  
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究科、受入期間(年月日)、具体的な履修状況、研究発表内容等の概要)
- ⑧ 国際研修  
(プログラム名、派遣先機関、国・都市名、派遣期間(年月日)、プログラム概要、研究発表内容等の概要)
- ⑨ 国際インターンシップ  
(プログラム名、派遣先機関、配属部署、国・都市名、派遣期間(年月日)、具体的な活動、プログラム内容等の概要)
- ⑩ その他(具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度等の概要)

|   |             |
|---|-------------|
| 学術活動区分<br>(①～⑩を記入)  | ④国際会議(研究発表) |
| <p>【学会名】<br/>International Convention of Asia Scholars (ICAS) 13</p> <p>【国・都市名】<br/>インドネシア・スラバヤ</p> <p>【発表題目名】<br/>What Do Students Present in Job Interviews?: Student Activities during College</p> <p>【発表形式】<br/>口頭</p> <p>【発表予定年月日】<br/>2024年8月1日</p> <p>【発表内容等】<br/>ICAS13のパネルセッションである“Consequences of Educational Expansion in Contemporary Japan I: Behavior and Attitude among University Students”にて報告する。<br/>本報告では、日本の大卒就職について、①学生が在学中に熱心だった活動のうち何を就活で重点的に語るのか、その傾向に時代変化はあるのか、②そのような過ごし方や語り方をした結果どのような企業に就職したのかという2点を計量的に検討する。用いるデータは、2023年に実施した「暮らしと仕事に関する全国オンライン調査(SSJDA Panel)」である。学生が自ら語る(嘘をつく)ことができるような場面で、どのようなことがなされて初職に結びついていくのか検討することで、学校歴の議論を重点的にしてきた教育から職業への移行研究に貢献する。</p> |             |

- (注) ① 年月日は西暦で記入してください。  
 ② 英語論文発表については報告する学術活動において発表又は受理されたもの。  
 ③ 上記に記載しきれない場合は、ページを追加しても差し支えありません。  
 ④ 複数回の学術研究活動による報告の場合、適宜本ページを追加し、2つ目以降についても必要な内容を網羅してください。

## 6. 学術活動による成果

※報告する学術活動について、教育分野における国際的リーダー人材の育成とその研究成果を海外に発信することを目的とした教育研究創発国際研修の趣旨に照らし、その成果を具体的に記載してください。学術活動により得られた自身の研究課題につながる成果についてもわかるように記載してください。

※本欄に書ききれない場合、ページを追加しても差し支えありません。

「教育研究創発国際研修 I」の目的は、日本の大卒就職における学生生活について、何が語られ就職に結びつくのかを量的に明らかにした研究を、国際会議の場で報告することであった。研究成果を国際会議で発表することで、今後研究成果を国際的な議論に位置付けていくための共通基盤を探ろうとした。

日本の教育から職業への移行は、新卒一括採用の慣行により特徴づけられる。この慣行は、長期雇用を前提とし、特定のジョブではなく企業の中で様々な仕事を経験しながら訓練を積み (OJT)、企業内で昇進していくという労働市場の制度と大きく関わっている (Lincoln & McBride 1987)。こうした独自性から、日本の大卒就職の議論は国内を中心に発展してきた。日本では選抜度の高い大学の出身者ほど就職後の訓練可能性が高いとみなされ、大企業に就職しやすい傾向が一貫して指摘されてきた。しかし、近年では「学生時代に力を入れたこと (ガクチカ)」が盛んに尋ねられるなど、学校歴にとどまらない就活の側面に着目する必要性が生じている。

そこで本報告では、こうした前提となる日本の労働市場や就職活動の特徴を説明した上で、在学中に熱心であった活動と、就職活動中に重点的に話した活動について、学校歴や専攻、初職との関係を量的に分析した結果を示した。また、それらの分析結果の解釈につながるような語りを、昨年度報告者の実施したインタビュー調査から引用した。報告後には、セッションの discussant やオーディエンスから質問をもらい、分析の展開可能性や、日本の大学・就活について議論することができた。就活という日本に特徴的な現象に関する研究を、教育社会学分野にとどまらないアジアの地域研究者が集う国際会議の場で発表できたことは、今後、国際的な議論の関心に日本の事例で貢献するような研究を進め、国際的なリーダー人材となる上で資するものである。